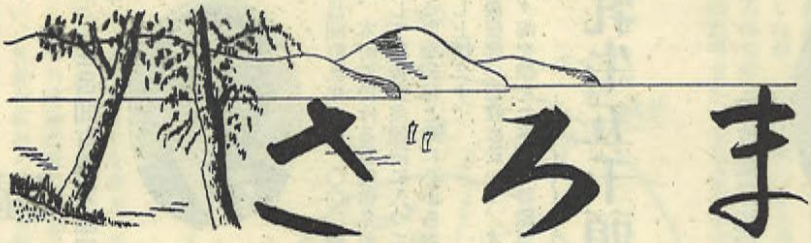



特集

# 乳牛五千頭祭

（草地造成による放牧風景）

## 酪農業確立のために精進

佐呂間町長　船木長一郎

多年宿望してまいりました寒冷地農業確立の基盤形成が推進され、その根幹をなす乳牛の飼育頭数が5,000頭を突破致しましたことは誠に御同慶にたえません。

想えば、昭和28、9年の農業災害を機として酪農振興対策が計画され、昭和31年高度集約酪農地域の指定を受け、乳牛導入、草地造成施設強化に対する系統融資の道を開き、町有貸付制度の創設、国、道、酪農公団の貸付牛の導入などの行政措置と併行し、農業協同組合の増殖改良指導、人口受精、家畜衛生管理等の強化、酪農団体農民組織による乳畜産物の消流、価格に対する改善要請、酪農家各位の基礎確立に対する意欲の向上、農業改良普及所の全面協力を得た渾然一体の推進態勢によって昭和30年僅か755頭の保有頭数が33年には2倍の1,500頭、昭和38年には3,000頭の成果を収め、先達功労者に対し感謝の意を表し共に将来の発展を誓いました。

爾来、増殖に伴う重点対策として昭和39年度より農業構造改善事業として、牧野草地の造成に意を注ぎ、或は優良乳牛導入資金に対する利子補給制度の新設を図り、質的進展を策しておりますが、酪農家各位の将来計画は極めて遠大なものがあり、これ等に対応するために本年佐呂間町酪農近代化計画を樹立し、国、道の施策とともに引続き町の草地造成、未利用地の開発優良粗飼料の生産増強、優良乳牛の導入促進、酪農業振興に伴う環境整備等を促進して目標の達成に資したい所存であります、打続く冷災害を蒙り加えて災害は政治災害とか、人的災害とか外3者の冷厳な批判を受けており、私達は過去を謙虚に反省し、国に要清すべきものは強くこれを求めると共に町内的には更に結束を固め自立意慾を高め健全な酪地農業確立に精進致す決意であります。

# 更に酪農業の躍進を期して

佐呂間町農業協同組合長 西田要造

佐呂間町乳牛が五、〇〇〇頭に達し、本町に於ける営農体系の基軸として整斉発展段階に入つて来ている事を皆様と共に心からお慶び申し上げます。

酪農振興の過程に於いて、オホーツク海を控えた本町の特殊気候による寒冷地帯としての悪条件を克服し、農業経営の確立を図るために乳牛の導入を行い、幾多の先人の御苦労により着実なる発展をして来た訳ですが、道及び町、農協の貸付牛制度と共に優良牝牛の導入を図る一方先進地である八雲地方より純血高等登録牛を移入、合せて紋別の酪農家が多年育成の名牛ハルサメ号等の導入増殖を図り、その系統牛が全道品評会に一位入賞、殊に乳牛の飼養管理と経済検定の実施による酪農経営の合理性を追究、全町を挙げて全道乳質改善共励会に参加し、昭和四十年度準北道道、昭和四十一年度優秀賞に輝く栄冠を受けたことは、酪農経営に取組む皆様の意欲と関係者のたゆまない努力によるものであります。今回乳牛五、〇〇〇頭を突破し、全管内的にも漸く酪農を基盤とせる佐呂間町乳牛の名声が高まり、乳牛を主体とする家畜場を北見管内二ケ所設置に対し昭和四十一年佐呂間町に設置され管内乳牛消流施設として活用されている現況下更に充実した体制のもとに経営自立確立を図り佐呂間町より冷害を拒絶すべく皆様の御協力を期待いたしますと共に今日の慶びの日を更に躍進する誓いの日と致したいと存じます。

# 乳牛五千頭突破を祝して

若佐農業協同組合長 片岡丑治

佐呂間町農業の構造改善事業計画の中で、北辺農業の安定の為に酪農を基幹とした農業振興の方針を樹立して五ケ年目に当り、当初計画した乳牛五、〇〇〇頭飼育の実現を見たことは町農業の振興と安定の為に誠に喜ばしい限りであり、又こゝまで築き上げた酪農家の皆様の努力に対し心から敬意を表します。

もとより、現在の経済社会の中で農業を取巻く諸状勢は誠に厳しいものがあり、現在では満足すべきものではありませんが、町の農業振興方針の基礎が出来ましたので、これを土台として、酪農を中心とした農業経営の合理性を皆さんが追究し、安定した農業経営の実現に御精進をお願い致します

農協としても更に決意を新にして酪農振興に努力する考えであります。

本日こゝに乳牛五〇〇〇頭達成記念式典を行うに当り、佐呂間町の農業及び酪農が益々発展されんことを祈念して心からお慶びを申し上げます。

◇ ◇ ◇

## 表彰状

佐呂間町農業協同組合長 西田要造
若佐農業協同組合長 片岡丑治
若佐農業共済組合家畜診療所長 竹中重春
佐呂間町農業共済組合家畜診療所長 佐藤晴信
佐呂間町農業協同組合技師 垂水道明
若佐農業協同組合技師 渡部幸

## 感謝状

佐呂間町字（順序不同）

知来 片平俊男
仁倉 津田市蔵
北長屋麻市
若里 定久保男
仁倉 津田仁作
幌岩 鈴木三蔵
西富 垂水弘良
浜佐呂間 増子正長
幌岩 内田正
若里 江田喜太郎
〃 鈴木市郎
北 川滝惣五郎
知来 大山真一
富武士 井上武治
浪速 芦沢吉夫
共立 十亀正美
大成 芝晴次郎
栃木 高瀬甚三郎
共立 渡辺一進
中園 菅原与一
富丘 北原武男
大成 松木半次郎
栃木 田中祐一
大成 柳原政行
栃木 牧野統
朝日 大西正一

**北海道知事・道議会議員選挙投票日は**

**4月15日です**

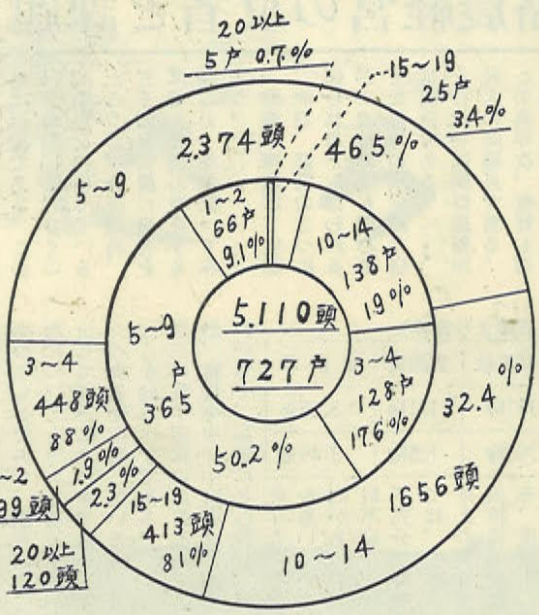
忘れずに必らず投票しましよう

# 乳牛五千頭達成の歩み

佐呂間町に乳牛が移入されたのは、大正初期であり、当時は交通不便なため、牛乳の販売する途もなく僅かに自家用に供する程度で特に農業経営上の目的がありませんでしたが、天候不順による農作物の不作対策として、年々乳牛の飼養が勧奨され、北見畜産組合のするようになった。その後生乳出荷の不便を解消するため、部落毎に集乳所を設置し、収入の増加が得られ、以来乳牛の飼養熱が高まり有畜農業の経常が本格的に始められた。

**貸付牛により増殖計画** このように本町の酪農は、冷害凶作の悪条件を克服するための唯一の経営であることを、指導者は力説し、昭和二十八年以来の冷害を契機として、町の乳牛増殖計画を樹立し、及ばずながら国、道の施策と呼応して町有貸付牛の制度を設け、集約酪農地域の指定と併行し、農家の積極的な導入意欲と、関係機関の献身的な御指導により、国有貸付牛二〇頭、道有貸付牛一八〇余頭、町有貸付牛一二〇余頭の導入をなし、昭和三十三年には宿望の一、五〇〇頭達成をなし、この制度の運用は高度に活用され、多頭飼育政策が進められた。

乳牛飼育頭数及戸数




幹旋による補助乳牛を導入、有畜農業の創設が図られました。しかし乳牛の飼養頭数が増加するに伴い、乳量を基礎とした品種の改良が要望され、ホルスタイン系の種牡牛を導入し種付に供用し、乳量の多いホルスタイン種が普及

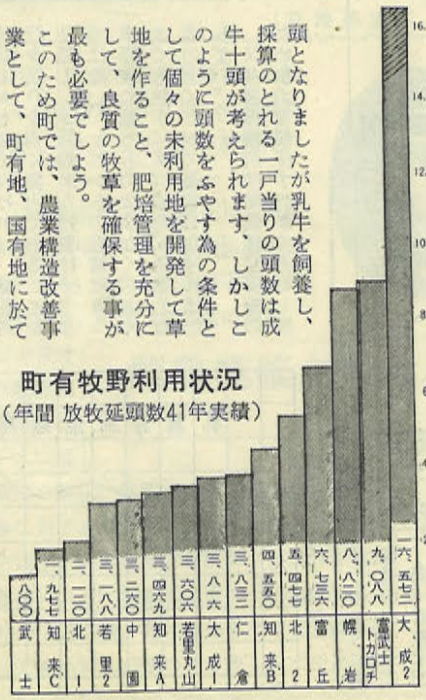
(ホルスタイン種乳牛)

## 町有牧野造成

乳牛飼育は寒地農業確立のための重要なポイントを占めている、当町でも、昭和三十九年農業構造改善計画を樹立、基幹作目を、乳牛、甜菜、の二つに設定し、基盤整備事業に着手しました。昭和三十九年には乳牛頭数も約四、〇〇〇頭に近づき、一戸五、三頭となりましたが乳牛を飼養し、採算のとれる一戸当りの頭数は成牛十頭が考えられます、しかしこのように頭数をふやす為の条件として個々の未利用地を開発して草地を作ること、肥培管理を充分にして、良質の牧草を確保する事が最も必要でしょう。

このため町では、農業構造改善事業として、町有地、国有地に於て既に五八六ヘクタールの牧草を造り、草地造成、牧道、牧柵の設置、給水施設などの施設をなし、多頭飼育対策を講じています。今後に於ても既設牧野の草地の高度化と、牧野造成を重点施策としてとりあげる必要があります。このように基盤事業が完全に実施されることにより酪農発展におゝきく寄与し、農業の柱ともなる乳牛飼育がさらに進展することを期待します

町有牧野利用状況
(年間 放牧延頭数41年実績)




町では四十一年度より新しい施策として、農家が優良乳用牛（純血種）を、農業協同組合の斡旋により導入し、資金を貸付された者に利子の補給をしますが、次の条件があります。

## 優良乳牛導入

一、農業協同組合が貸付する資金であること

二、貸付金額は購入金額の八割以内

三、貸付期間は五ヶ年 四、貸付利子は年八分以内 五、償還方法は一年据置四ヶ年元利均等償還 六、利子補給額と限度額は、資金借受者に対し年四分五厘以内の利子補給を行い、補給総額は毎年百万円以内とします。

七、利子補給対象者は次の要件を備えなければならない

(イ)優良乳用牛の飼育能力を有するもの

(ロ)利子補給によりその効果が期待できるもの

(ハ)自己資金により優良乳用牛の購入が困難であるもの

八、選定については農業協同組合と協議し農業委員会に諮問の上補給者を決定する

以上が新しい制度の主な内容となっていますが不明な点については遠慮なく問合せ下さい。

# 酪農経営の反省と課題

現在当町は一戸当り、頭数で七頭、成牛で四頭余りである、然し酪農経営で自立しようとするならば、最少限頭数で現在の二倍、即ち成牛で一〇頭余は必要であろう、又乳量も現在四トン足らずから、五トンの壁に立ち向わねば、酪農で、「七ケタ」の所得は至難である。この目標の為には、多くの問題点を内蔵しているだろうが、今後の為、五千頭を契機に過去を反省し酪農の当面する課題の一部を探ってみよう。

酪農の課題は、生産、流通、経営の三つに搾られるとも言われるが、当町の最も関心のもたれるのは生産と経営関係である。

その才一は飼料確保が最大の問題点である。この為年次、牧野も増設し、育成牛の飼料供給を急いでいるが、依然慢性的飼料不足から逸脱していないことは単に町だけでなくその多くは酪農家個々が大いに反省しなければならない。

現在、牧野を含め成牛一頭当り、五〇～六〇アールの面積で飼養されているが、粗飼料の購入などからみて、極めて生産性の低いことを裏付けている。五〇アールで一頭飼育するのが目標ではあるが、その為には牧草やデントは、七～八トン位の生産を上げる肥培管理をしなければならない、これが不可能な場合増反するなど、飼料面積の確保が必要であることを銘記すべきである。

才二は、多頭化につれ乳量の減少が目立つことである。これらは飼料不足や飼養管理の不徹底から生ずるものであり、飼料同様、管理についても労力も関連するが、決して疎かにすべきでない、五トンの乳量を生産している人も多いことを知るべきである。

第三に乳牛個体の品質改良であるが、種雄牛や仔牛育成はとかく忘れがちで、品質にとらわれ、高い牝牛などの導入を急いでいる傾向があるが、飼料不足や管理の不充分な酪農家では、むしろ種牛えの関心や育成技術の習得こそ、後継牛の能力向上の前提であり、その上に立って品質改良が行われねばならないと思う。

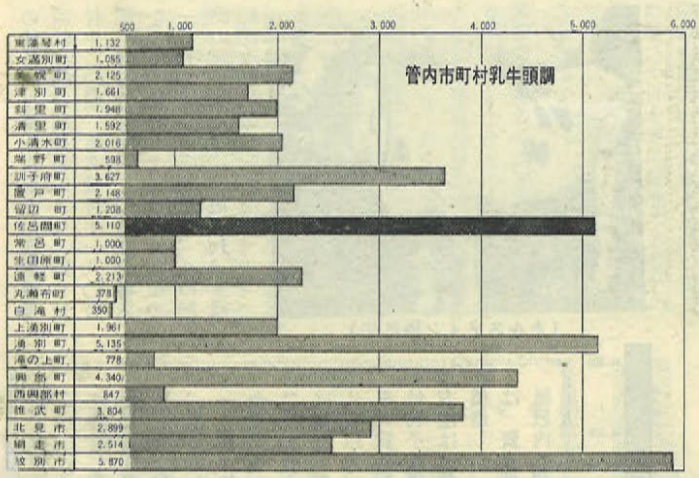
才四に経営者の能力及び意慾の点が酪農のポイントと言っても過言でなかろう。即ち酪農は飼料が充分確保出来れば、或いは頭数が揃えば、所得が増加するとは限らないからである、種々の生産課程を経て始めて結果が生み出されるものである、したがって酪農は計数や数字を根拠に経営の拡大方向を見いださねばならない。

近年多頭化につれ牛舎の増改築や機械化等の傾向が著しいが、余程吟味したものでなければ、経営の行き詰りを招く要因であることを認識し、絶対無駄な投資はすべきではない、これからの経営はカンや経験に頼るものではなく、あくまでも数字に基づいた、企業的意識の上に立つて運営しなければならない。

又各関係機関は酪農経営安定のため全力を傾注すべきであるし飛躍的酪農の発展が訪れることを期待し今後の課題としたい。

（乳検成績より抜粋）

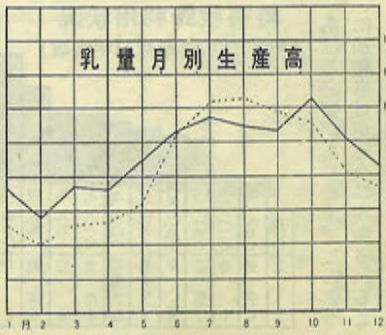
| 年度 | 調査戸数 | 1戸当り経産頭数 | 1頭当り年間乳量 | 乳脂量 | 脂肪率 |
|---|---|---|---|---|---|
| 昭和37年 | 64戸 | 2.3頭 | 5.111Kg | 171Kg | 3.35% |
| 昭和40年 | 46戸 | 4.2頭 | 4.793Kg | 165Kg | 3.49% |



（全道乳質改善共励会第一位入賞）

## 乳牛品評会

畜産振興の一環として、昭和三十二年を才一回として、綜合家畜品評会が毎年盛大に行なはれてきましたが、昭和四十年には乳牛四六〇〇頭と飛躍的に殖たので、三十九年の才八回総合家畜品評会を最終とし、昭和四十年七月十日町並びに佐呂間、若佐両農協共催の才一回乳牛品評会が佐呂間種馬所でな行はれ、一〇〇余頭が出陳されました。このように乳牛の資質の向上が図られ、同年若里木間藤三郎所有の才四一サロマハルサメ号が全道品評会で一位を獲得する等、当町の乳牛飼育熱はいやか上にも高まった。

そのため関係機関では先進地から純血高等登録牛を移入し改良増殖に積極的な努力が払われています

（乳牛品評会風景）